



「免疫の力でがんを治す患者の会」 坂口 力 会長に訊く

より良い治療と、免疫療法 の「健全な発展」 のために

取材・文●編集部

2017年9月23日(土)、東京・千代田区の御茶ノ水カンファレンスセンターにおいて「免疫の力でがんを治す患者の会」第2回市民セミナーが開催された。その詳細については前頁(59〜61頁)で紹介したとおりだが、編集部では、市民セミナーが開催される直前に坂口力会長の講師控室を訪ね、「免疫の力でがんを治す患者の会」設立の経緯や、今後の活動方針などについて訊いた。

大腸がん手術後に余命を 宣告され、免疫療法を受 ける

「まず、「免疫の力でがんを治す患者の会」設立の経緯と、設立の趣旨についてお聞かせください。」

坂口 本会を設立しようと決めたのは昨年(2016年)9月30日です。正式には今年になってからで、設立記念セミナーということで第1回目の市民セミナーは本年1月に開催しました。

なぜ、こういう会を立ち上げたかと言いますと、がんにはいろいろな治療法があって、「患者の会」もいろいろな形で存在するわけです。われわれとしては「免疫」という言葉を前面に出して患者の会をつくらないうと趣旨が明確に伝わらないのではないかとということで「免疫の力でがんを治す患者の会」という名前で患者会をつくったということです。

「あえて「免疫の力」という言葉を入れた理由についてもう少し詳しく教えてください。」

坂口 免疫細胞療法によって元気になられた方が増えてきたものから、その皆さん方が「ぜひつくりたい」という話になり、「じゃあそうし

ましよう」ということになったわけです。

というのも、実は私自身も9年前に大腸がんになりました。都内の病院で手術を受けたんですが、もうすでに腹腔内のリンパ節ががん化していて「余命3年」と言われました。それで免疫細胞療法というのがあるというのを知って、受けたところ、今は再発することもなく元気でやっています。

「その免疫細胞療法をお知りになったのは、どなたかのご紹介ですか。」

坂口 私は全然知らなかった。いえ、免疫療法があるということは知っていましたけど、その効果がどの程度あるかということとは、まったくわからなかった。それで、主治医である外科の先生に「免疫療法はどうでしょう」とお訊きしたところ、「まだ治療法として確立するまでには至っていないんじゃないかな」ということでした。それで帰宅してから自分でインターネットで調べてみると、データが詳しく出ているのが都内のクリニックであったわけです。それで、連絡を入れて治療を受けることにしました。

「手術を受けてどのくらい経って

から免疫療法を始められたんですか？」

坂口 外科手術では完璧に取ってもらったと思うんですけどね。余命3年と言われまして、手術が落ち着いたところにクリニックを訪ね、免疫療法には半年くらい通いました。

「そうしますと、先生ご自身も実際に免疫療法をお受けになり、その効果も実感されておられるわけですから、「患者の会」設立にも積極的に関わられたわけですね。」

坂口(厚生労働大臣の経歴を持つ) 私がするのもどうかと思たんですけど、周りから「あなたやってよ」という声がかかったもんですから、会長を引き受けたという次第です。

「患者会」の設立趣意書と、 治療の選択肢を広げるた めの要望書

「話は戻りますが、貴会設立の趣旨について伺います。」

坂口 一言で言いますと本会は、がんの治療のために免疫細胞療法を受けた患者とその家族が、免疫細胞療法の健全な発展を目的として結成した、ということになります。

免疫細胞療法は、本邦において治療開始から17年の時が流れ、現在では多くの患者さんが治療を受けています。累計では、4万人以上の患者さんで約45万回以上の治療が行われたと推計されています。

これだけの患者さんが、免疫細胞療法を受けておられるわけですから、費用面におきましても何とかならないかと思ひまして、今、国に対して当会の設立趣意書と「がん治療

■「免疫の力でがんを治す患者の会」事務局
 〒162-0822 東京都新宿区下宮比町2番28号
 飯田橋ハイタウン518号
 TEL: 03-6280-7131 FAX: 03-6280-7071
 URL: http://imcell-t-chikara.com/
 E-mail: info@imcell-t-chikara.com

「免疫の力でがんを治す患者の会」設立趣意書
 平成27年12月に厚生労働省より発表された「がん対策加速化プラン」により、がん治療は従来と異なる治療法が今後増加し、がん患者の生存率は2025年から10年間で2倍に増加すると見込まれています。
 また、がん患者の生活に支障をきたしているにもかかわらず、がん治療の進歩は目覚ましいものがあります。がん治療の進歩は、がん患者の生活に支障をきたしているにもかかわらず、がん治療の進歩は目覚ましいものがあります。
 一方、近年の免疫細胞療法は、広島大学での高度先進医療の取り組みを皮切りに、1999年より民間医療機関でも治療が始まり、現時点で全国およそ600医療機関で実施されています。
 なかでも免疫細胞療法は、広島大学での高度先進医療の取り組みを皮切りに、1999年より民間医療機関でも治療が始まり、現時点で全国およそ600医療機関で実施されています。
 平成29年1月現在
 免疫の力でがんを治す患者の会
 会長 坂口 功
 (元 厚生労働省)

坂口会長が提出した「設立趣意書」

がん光免疫療法の登場
 手術や抗がん剤、放射線ではない画期的治療
 永山悦子 小林久隆
 オハマ米前大統領が年頭教書演説で紹介
 がん治療の一大革命として、今、世界が注目
 「がん光免疫療法の登場」
 (永山悦子著・小林久隆協力・青灯社)

紅鶴
 田中 博子
 「僕の思い出に博子さんは、平成10年6月発症し辛い治療、5回もの再発と転移の手術を受けました。何回でも蘇るフェニックス。私自身が学んだ事も多かった彼女自身の生き方を、是非皆さんにシェアしたいと思っています。」
 田中博子著・日本文学館

「紅鶴」(田中博子著・日本文学館)

法の選択肢を広げるための「要望書」というものを作成し提出しているところ。以下、趣意書の全文
 《平成27年12月に厚生労働省より発表された「がん対策加速化プラン」により、がん患者の悩みや負担は増加しており、事実、副作用に苦しむ患者は2003年から10年間で2・2倍に増加しております。
 また、がん患者の仕事に関する悩みにおいても、体力低下、副作用や後遺症による症状が原因で、勤務調整が困難などを理由に依願退職または解雇される患者は35%を数えるなど、状況は10年前からほとんど改善されておられません。
 一方、近年の免疫細胞療法は、広島大学での高度先進医療の取り組みを皮切りに、1999年より民間医療機関でも治療が始まり、現時点で全国およそ600医療機関で実施されています。
 なかでも免疫細胞療法は、広島大学での高度先進医療の取り組みを皮切りに、1999年より民間医療機関でも治療が始まり、現時点で全国およそ600医療機関で実施されています。

治療が実施され、実治療としての有用性に関する数多くの報告がなされています。また、免疫細胞療法は副作用がほとんど無く、安全な治療法として実施され、生活の質に影響を与え、少ない治療としての認知も深まっております。
 2014年の再生医療等安全性確保法の施行により、免疫細胞療法は一般の自由診療とは異なり厚生労働大臣が認定した認定再生医療提供の承認の下、規制当局への治療提供計画書、細胞加工プロセス、安全管理体制等を届出し、毎年度の治療提供状況等の定期報告を義務付けられる新たな枠組みの医療となり、環境が整備されました。
 しかしながら、法律下で安全性の担保された枠組みになったにもかかわらず依然として公的負担の受けられない一般の自由診療としての取扱いは多岐にわたっており、患者は経済的には多大な不便を被っております。
 したがって、免疫細胞療法が国からの臨床研究費等を得て研究が進み、公的負担の軽減が図られ、患者が多大な経済的負担を強いられずとも、いつでも、どこでも、誰でもが受けられる治療として普及させるべき治療法と考えます。》

「要望書」は、この設立趣意書に基づいて作成されている。
免疫療法の健全な発展のために、厚労省に積極的に働きかけていく
 現在、会員は何名くらいおられるんですか。また、患者会を設立されて数ヶ月経っていますか、会員の方から何かご要望とかありますか。
坂口 会員は現在、約100人ほどです。第1回市民セミナーを開いたときは、200人くらいの参加者がいました。
 要望としては、「より積極的に厚生労働省などに働きかけて、免疫療法を認めてもらうようにすべきだ」という声がたくさんあります。要望書は、そのような声に後押しされて出すことになったわけです。
 お手元に2冊の本をお持ちのようですが、それは今日のセミナーの資料としてお使いになるのですか？
坂口 これは、今日の講演でぜひとも皆さんにご紹介したいと思っております。1つは『がん光免疫療法の登場』という本で、小林久隆先生について書いた本です。小林先生が研究・開発された「光免疫療法」というのは、オハマ米前大統領が年頭教書演説で紹介したほどの研

究で、がん治療の一大革命を起こすのではないかと注目されています。これも書名にある通り「免疫療法」で、近い将来、日本にも入ってくるのではないのでしょうか。
 もう1冊の本は闘病記でしょうか。
坂口 『紅鶴(フラミンゴ)』という本で、24歳でがんになった田中博子さんという方が書いた本です。骨肉腫で、5回も再発・転移を繰り返して、とうとう右足を切断しなければならなくなりました。紅鶴(フラミンゴ)というタイトルはそこから来たものですが、5回も再発・転移を繰り返していた田中さんが最後に受けた治療は、「自家がんワクチン」という治療だったのです。G総合病院整形外科の先生に紹介されて自家がんワクチンによる治療を受けたそうですが、田中さんはこう書かれています。
 《あれから五年。約二年刻みに再発転移を繰り返してきた私の中の不良細胞達が、免疫療法自家がんワクチンを受けてからすつかりおとなしくなった。この免疫療法が保険適応され、がんにも苦しむ多くの方が治療できたらたくさんの方の命が救われるのではないかとと思う。》

これからは、どのような活動を展開されて行かれますか。
坂口 厚労省に積極的に働きかけていきたい。放射線治療を保険適応にするとき私は現職(厚労相)だったんですが、みんなが猛烈に反対するなかで懸命に努力をして、保険適応にしたという実績があります。